

軍隊に於ける「めし」考

ピルマのジャンクルは奥が深かった。歩けども歩けども果しなく続くジャンクル……それもその筈で九州がすっぽりと入つてもまだ余る程広いのだ。既に兵隊の背中には嚙嚙口糧の「甲」と称する白い木綿の背下に入つて居た米は一粒もばくこになる「カンメンホウ」之えもない。撃つに弾丸なく、食うに米なき退却なのだ。大休止に入るとその隊列は其の場にくづれる如く長々と寝そべる。その兵隊達の考える事は、あの湯気のたつ鬼の牙の森が真白な内地米のホカ／＼飯の幻想だけである。胸の痛傷を三角巾で巻いた兵隊の一人が「あ、腹一杯白米のしが食えたら今死んでもいいかあ」とつぶやいたのが聞こえた。それが誰だったか振り返りもしない。それ程俺達は飢え、疲れ果てていたのだ。「フミネを思はれば一杯食えるぞ」とそれだけを希みとして重畳たる山脈を越えジャンクルを這り文

鈴

れから十日かしてすつと後方に退つた兵隊が、炊き上つた許りのめしの入った飯盒を持つて、貴重品袋に入つた亡き戦友の遺髪に味ら／＼と、そのめしを舐りかかむから「そろ／＼貴族が夢にまでみていた白いめしだ。腹一杯食つてくれよ」と叫び大粒の涙をホロ／＼降らせ乍ら驚きみに行っていたのが戦後三十年たつた今でもほ、きり想ひ出す事出来る。

自分が満足するお茶がなかつたら飯を食はない今の子供達では想像も出来ぬ光景だらう。大体軍隊で一番腹を空かしてゐるのは初年兵である。入隊後三ヶ月後の一朗の検閲が済まない中に朝起きてから満足に飯を流つた者は恐らく居ない筈だ。それ程初年兵にはまひしいのである。こまねずみの様に一日中走り廻つて身体を動かしてはいないとならぬから余計空腹になる。その初年兵に割り当てら

れる三度／＼の麦飯は食器にサラット一杯である。それに反して我々している古年次兵は山盛にしないとゴキゲンが悪い。勿論半分も食わないで昇殿にする。食糧返納に成事に走る初年兵は当然その食糧の中に首を突き込むことになる。どんな金持のぼんぼんでも例外はない。然し百年次兵に見つかる例に依つてピンタの端に見舞はれるから素早く処理しなければならぬ。俺もその当時飯を噛んで食つた覚えはない。「丸呑み」「ぐい呑み」である。それでも消化不良なんて絶対はない。

日曜日の家族の面会日にあの真白なオニギリのなんと光り輝いていた事か。面会に来た親兄弟との話し合いより「カツコメ／＼」に忙しい。そんな俺の姿をじつと見つめる母の眼ににじんば涙が忘れられない。

日本人は西米食う事を言う奴は下品な奴と云う觀念が有つた。ところが上品な家庭の出の兵隊が残飯にむしゃぶりつくのを見ると、矢張り生きる為の人間の本能のすまじさに

飛ろしさを感ずる。過去に於ける大東亞戦争でもせめて兵隊達に腹一杯食はせていたから余程その状況も変つていた事だらう。食うものがないから体力がガク落ちになる、病魔に犯され易い、それに適当な状況判断もむづかしくなる、死ななくても良い兵隊を随分と殺した事になつて了つた。

人間一回い豊の飯を食つた仲だ」と云うと特別な重荷感が生れるものだ。軍隊の質と量と云う貴重なものもそれであらう。そうなる「めし」の効用たるや計り知れないものを得た。俺の戦つたセルマ戦線では十キロ余の米を争つて日本軍四志で分隊単位で奪ち合つた例も知つている。昭和五十年になり平和が来き食糧も豊富になると、こんな話がある。「ウソみだりに聞える」。

昔から「オテントウ種と米のメシはついて廻るものだ」と云う古い言葉があるが、三五年間の戦場生活でその言葉が信じられない事はいや、と云う程存分に知つた事である。